説教要旨「折りが良くても悪くても」

エレミヤ書　３６章１～１０節
テモテの手紙Ⅱ　４章１～８節

聖書から読み取れるユダヤ人社会は、同調圧力の強い社会だといえます。今日読んでいただいたエレミヤ書には、そんな同調圧力に苦しめられた預言者エレミヤの姿がありありと描かれています。

ユダ王国が滅ぼされようかという時代に、楽観的な預言をする職業的預言者の一団がいました。彼らは、「神の民であるイスラエルは、神に守られているから大丈夫だ」などと語り、危機感を煽り悔い改めるよう訴えるエレミヤの言葉を否定しました。エルサレムの民衆は耳障りの良い彼らの言葉を支持し、偽予言者扱いされたエレミヤは、「神殿に入ることを禁じられていました」(5 節)。それでも、エレミヤは弟子であったバルクを介して語り続けたのです。

使徒パウロは、「御言葉を述べ伝えなさい。折りが良くても悪くても」（Ⅱテモテ 4:1）と綴っています。この手紙は、パウロがテモテに宛てた遺書のようなものだとも言われます。獄中にあったパウロの処刑はもう目前に迫っていました。テモテの教会も、厳しい迫害の最中にあって、教会に集う人々の足も鈍り、人が減っていたのかもしれません。まさに折が悪いのです。それでも、だからこそ、パウロはテモテに伝えるのです。「御言葉を宣べ伝えなさい」と。

「御言葉を宣べ伝える」ことの第一歩は、自分がクリスチャンであること、イエス様に救われた者だと伝えることです。パウロの生きた時代は、言葉通りキリスト者であることで殺されかねない社会状況でした。わたしたちはどうでしょう。キリスト者であるということで、なにかしら不利益を被ることはあるかも知れませんが、キリスト者であるというだけで、捕らえられることはないし、ましてや殺されることなどは無い社会に生きているのではないでしょうか。

軋轢はあるかもしれません。それでも、折を見ながらではなく、折りが良くても悪くても、「わたしはキリスト者です」「イエス様に救われた者です」と、胸を張って言えるように、神様の励ましと支えとを祈り求めつつ、新たな一週間へと歩み出しましょう。

（２０２１・１２・５　説教者：稲垣真実）